

# 社会思想史研究法についての一視点

—パーソナリティからのアプローチについて—

井 上 公 正\*

An Essay Concerning Methodology of a History of Social Thought  
—An Approach to Thought from the Personality of Thinkers—

Kimimasa INOUE

## はじめに

この小論は、長年にわたって社会思想史の講義を担当し、学生に、社会思想史を勉強する場合、ある思想家の社会思想にできるだけ近づくためには、これこれしかじかの点に留意するように、と話してきたことを要約したものである。したがって社会思想史や政治思想史の碩学の高度にして精緻な方法論ではなくて、学界の片隅で独りでもそもそと考えてきたものの模索の拙い軌跡である。思想史の方法論には、政治思想史的方法、社会哲学的方法、解釈学的方法、知識社会学的方法等いろいろな秀れた研究方法があり、著作があるので、本格的な思想史の方法の問題はそれらに譲ることとする。

小論の意図は、社会思想を研究する方法についての精緻な詳論に至る以前に留意しておかねばならないと思われる一つの視点、すなわち、思想家のパーソナリティとその形成過程からかれの思想にアプローチできないものかということと、社会思想を究明する過程で隘路があるか、ないか、ということとを考究し、少しでもその思想の本質に近づくことのできるための留意点を大雑把に示そうとするものであり、また、若い学徒の研究の導きの一つの糸になればとの念願を果すためのものである。

なお、思想家の思想を正しく解釈し理解することができるか、どうかはアプローチする主体の力にかかっていることも否定できない。研究者の認識力、つまり、学力、態度、関心、先入見、偏見、思想傾向、問題意識などによって、かれが思想を理解し把握する仕方や程度も異なってくる。外国の思想を究明する場合、研究者の語学力が思想の理解を大いに左右することは述べるまでもない。また、研究者が思想家と共通の言語をもって思想を解釈できるか、どうか。こういった主体の認識の問題は重要であるが、この小論では紙数の関係もあり問わないことにする。

前もってつぎのことをことわっておきたい。すなわち、この小論はあくまでも素描であり、密度の高い詳論ではない。したがって、一見、論理の飛躍や短絡と思われることもあろうが、これはいずれ各論の詳論によって補われるべきものであり、別の機会に論じることとする。目下のところ、思想史研究法についての専門の研究者の業績にゆだねることとする。

## I 社会思想(史)の定義

社会思想史の方法の問題をとりあげる場合には、社会思想、社会思想史とは何か、という社会思想の概念あるいは定義を明確にする必要がある。なぜならば、それによって方法が規制されるからである。社会思想史という書名をもつ本はすべて社会思想についてのなんらかの定義をしている。田村秀夫は、その著『社会思想史の視点』において、多くの著書で述べられた社会思想の概念を分析、整理して紹介している<sup>2)</sup>。したがって今さら筆者の拙い定義を述べることはためらわれるが、しかし筆者の考える「方法」を述べるとなれば、定義の問題を避けて通ることができず、心ならずも触れざるを得ないので、一応つぎのような社会思想の大まかな定義をしておく。

古来それぞれの地理的、歴史的、社会的な生々しい具体的な諸事情を身に帯びた民衆や特定の個人は、憂き世に対して何らかの感じ方、見方をし、不満をもちながら時には批判もし、生きる支えやより所となるエートスや考えを抱き、また抑圧からのがれた幸福生活を夢見、渴望してきたが、かれらのうちのあるものはその達成できるような社会を形成し、あるいは維持しようと努力し——考え、主張し、実践し——てきた。社会思想とは、そのような見方、考え方や努力が、当時のある思想家によって、「社会はかくあるべし」と意識的に、ロゴス的に表現された精神的産物、つまり理念であり、理想社会、よりよい社会の構想であり、かつ、一般民衆に、あるいはある階級、階層の人びとに広く受け容れられ、かれらの生きる支えとなり、かれらの行動の指針や目標となるとともに、かれらを動かし、よりよい社会の発展に貢献あるいは影響したと思われる思想である。

社会思想史とは、このような思想を著書、論文、書簡、パンフレット、法律、宣言等に求め、それを過去(当時)の人間社会に光明を与え、尔来、社会の進展に貢献し、現在あるいは未来の社会をよりよくするために意義や影響力をもつものとして研究するとともに、このような思想に対抗する、関連する、あるいは影響すると思われる思想をも併せて考究する科学である。社会思想(史)をこのように定義すると、社会思想は、単なる社会についての考え方ではなく、かなり狭く限定されたものになる。このような社会思想を探究する方法を模索してみよう。

## II 研究方法についての一視点

社会思想は、いろいろな資料、すなわち、特定の思想家の言動はもちろんのこと、文芸作品、法文、宣言、無名のパンフレットなどにみられるが、前述の定義の観点からすれば、まず、第一に特定の思想家の著書、論文、書簡、日記などに述べられた社会思想をとりあげるべきであろう。多くの研究者は、ある特定の思想家をとりあげ、その時代的な背景と生涯(人間形成、思想形成)について詳細に述べた後に、かれの思想の本質に迫っている。この手順は、研究者たちによる思想の解明や出される結論が千差万別であっても、探究の手續きとして当然な常道であるが、この方法の中に、とりあげる人物、思想家のパーソナリティやその形成過程の面に留意点の一つをおいたら、よりいっそう思想の解明に役立つのではないだろうか。ある人物の言動を解明する方法の一つとしてパーソナリティの面からアプローチするのが定石である。ある思想家がある歴史的な段階でどうしてあのような言動をしたのか、あのような考え方をしたのか、ということを問う場合に、かれの生涯つまり生活史的展開から推測されるかれのパーソナリティやその形成過程からアプローチすることを試みることはできないものであろうか。ある思想家の社会思想を、かれの主張した通りに、できるだけ正確に理解し、把握するために、かれのパーソナリティと関連させて解明していく方法を多くの社会思想史研究法の中の一つの

視点とすることはできないものであろうか。パーソナリティはそれぞれの人びとにどのように形成されるか。この問題は、主として、心理学、社会心理学、社会学、教育学、教育心理学、精神医学等によって綿密に研究され、成果があげられているので<sup>3)</sup>、それらの研究によることにし、それらによって述べられている骨子のみを社会思想との関連で、概説的、教科書的に、まことに大雑把ではあるが述べることにする。

### III パーソナリティの形成

私たち個々の人間は、歴史上のある時期に、地球上のある所に生まれおちると、おのずからある社会階層や社会階級に属し、固有の生活史を展開しはじめるが、先天的な遺伝などの生得的素質（生物学的要因）を基盤として、後天的条件である習得的要素となる諸種の環境（環境的要因）と対応することになる。その際この両要因は相互作用する。かれは、パーソナリティの形成にとって不可欠の重要な要因である生得的素質を基盤に、基本的生理的欲求をはじめいろいろな欲求を満たそうと、欲求の組織体制を次第に形成しながら、無意識的、意識的に、あるいは、自我意識が強くなれば、明確な意志をもって環境に働きかけ、環境に順応し、環境と相互作用し、いろいろなことを経験して人間形成をする。いいかえればパーソナリティを、倫理的な面からいえば品性を形成していく。

生得的素質とは生物（動物）としての生命力、遺伝とそれとかかわりをもつ体質、体格、気質等であり、パーソナリティの重要な基盤である。習得的要素となる環境とは私たちの周囲にある、人間生活と関係する外部の諸条件を一般にいうのであるが、自然的環境と社会的環境とにわけて考えられている。気候、風土などの自然的環境が人間の生活、進歩発達、さらにはパーソナリティの形成に大きな影響を与えるが、その形成にとって一層重要な要因となるのは社会的環境である。これには政治体制、経済体制、社会構造、文化事象などといわれるものがあり、これらのもとに社会的基盤の構成要因である社会階層、社会階級、家族をはじめとする諸集団、諸関係、準拠集団、また、性、年齢、学歴、職業等で分類されるような社会的カテゴリーなどがある。私たちは、このような環境に属して生活しているが、子供から大人への成長の過程から見れば、家庭、学校、交友、地域社会（農村、都市）、職場などの諸集団に属して人間形成、ひいてはパーソナリティ形成をしている、という述べ方もできるであろう。

個々の人間の属する階層、階級、諸集団は、それぞれに特有な社会心理、つまり感情、気分、願望、精神的雰囲気、集団意識、エートス、習俗、世論などといわれるものや、文化、伝統、価値、価値意識、規則、法律、社会規範、制度、社会的性格、機能（それぞれの集団が外部の社会や集団に対してもつ機能）等を大なり小なり、それぞれもっている。

個々の人間は、それぞれ特有な生得的素質を基盤とし、欲求の組織体制をもった一個の心理・生理的有機体として、以上のような気分、願望、エートスなどの社会心理や社会的性格等々をもつ諸集団に、他の人びととともに、地位や役割をもって属し、人間関係（社会関係、人倫関係）を結んで、生活し、いろいろな行為を繰り返して次第に社会化される。これを成長の過程で見れば、かれは、物心がつき幼児から成人へと成長する際に、コミュニケーション過程で<sup>4)</sup>、学習する。つまり、しつけられたり、模倣したり、試行錯誤を繰り返したり、暗示を受けたり、言語を覚え理解したり、諸種の情報を偶然的に獲得したりする。その裡に自我を形成し、自我意識を次第に強くもつようになり、自我同一性を形成し、自己の欲求や感情が阻止されると葛藤、フラストレーションやモラトリアムに陥ったり、挫折したり、それから脱出するために思考をめぐらしたり、行動したり、といった諸々の過程を繰り返し辿り、上述の諸種の環境と相互作用しながら、それらに、直接、間接に影響されて社会化（内面化）される。だが、かれは、

ただ単に受動的に社会化される（受動的浸透としての社会化）のみでなく、意志を働かせて自己実現をめざして自己を改造したり、環境に積極的に働きかけ、環境を変改する活動を繰り返して行って社会化される（能動的同化としての社会化）。

このようにして繰り返される行為は集積され、習慣性をもつようになり、態度ともなり、ここに行動に一定の傾向が生じて体制化される。それが基盤的体制として一個の人間、つまり、心理・生理的有機体の中に内蔵されることになる。つまり、個々の人間は、諸々の行為の底に、それらの行為を規制する基盤、行為の範型をもつのである。したがって、ある程度一貫性のある行動をすることになり、また、他人によって、自己の将来の行動を予測されることにもなる。つまり一旦出来あがった行動傾向はつぎの行動を規制するのである。善良な品性を形成した人は道徳上善良な行為を常に自然に無意識的に、時には意識的に行うものである。

ここで行動といているのは、一つは外面的動作となってあらわれる——時にはあらわれないこともある——意識的、無意識的な肉体的行為であり、もう一つは感情、思い、思考作用、思考様式、思索、意識、精神的態度、思想、思想傾向などといわれる精神的活動である。この両者は、有機体の中で荷車の両輪のように一体となって、人間の現実の生き生きした生活の営みを形成している。このような両者一体となったものを行動ということにする。なお、行動の一面、すなわち、肉体的動作となってあらわれたものを行為ということにする。だが、個々の肉体的行為の背後には、衝動や本能もあるが、精神作用が働いていることは述べるまでもない。後者の精神的活動に目を向けることにする。私たち個々の人間は、社会化（内面化）の過程において身の回りにある、つまり上述のエストや社会的性格等々に馴染み、また反省や思考をめぐらして、生活意識、私的意見、素朴な人生観、世界観、社会意識や社会観、あるいは、価値意識や価値観、倫理観、さらには生きるよすがとなる思想をもつようになり、精神生活の枠組・構造をつくり、ある一定の精神的傾向、思想傾向あるいは基底思想をもつことになる。私たち個々の人間は、このようにして、特有なパーソナリティ、品性（倫理の面からいえば）を形成していくことになる。それぞれ特有なパーソナリティをもった私たちは、眼前につぎつぎとあらわれて応答を迫ってくる人間関係や諸事象等の環境に対して、ある傾向や一貫性をもって対応し生活しているのである。私たちは、かれは几帳面な人であるとか、ルーズな人であるとか、あるいはあの思想家は封建的思想のもち主であるとか、民主的な人物であるとか、ということをししばしば見聞するが、これらはパーソナリティの一面をよくあらわした言葉であり、一貫性のある基盤的な行動傾向、思想傾向を示している、つまり、人間像、思想像ともいえよう。

ある思想、あるいは社会思想を表明した思想家もまたかれのパーソナリティの形成に関しては同じ一連の過程を辿っている筈である。つぎにこのようにしてなんらかのパーソナリティをもつようになった思想家がどのようにして社会思想を表明するようになるのか、を考えてみよう。

#### IV 社会思想の形成

一般に人間が行動するということは眼前にある、あるいは出現した環境に刺激され反応することである。かれがどのような環境に刺激され反応するかは、かれの中に働いている心理・生理的な力の関係や行動傾向の体制によって規定される。極度に空腹な人は街で目ざとくレストランを見つけるであろう。山野草に強い興味をもっている人は、野山を散策している時に、すぐに野草に気づき、近寄ってながめ、花の写真を撮ったりするであろう。蛇の大嫌いな人は、畦道を歩いていて縄の横たわっているのを蛇が這っていると思いこんで逃げ出すであろう。遅

刻することに罪悪感をもたなくなった人は、団体旅行に参加し、集合時間にはいつも遅れ、グループの人びとに迷惑をかけていても、悪びれもせず、平気であるが、几帳面な人は集合時間のかなり前に必ず来て待っている。これらはパーソナリティから由来する行動をそれぞれ示したものである。思想家が環境に刺激されるということは、社会思想史の研究にとっては、あるパーソナリティをもったかれが当時の社会——政界、経済界、思想界、一般民衆の生活等のいわゆる社会全般——の状況を見て、現実の社会にある欠陥を認識し、つまり、矛盾感や欠如感におそわれ、また、不安や驚異や危機を感じ、あるいは、社会悪を認め、さらには、倫理・道徳上の諸悪を慨嘆して、問題意識をもち、社会批判を行ない、それらの諸々の悪を排除したいという欲求をもち、社会問題としてとりあげることである。これは執筆の動機となるものである。かれが当時の社会の客観的情勢をどのように見たか、また、かれが何を社会問題としてとりあげ論じるようになったのか——かれの問題意識、問題提起の動機——ということは、かれのパーソナリティ、すなわち、そこに内蔵されている行動傾向の体制、精神的な面でいえば、思想傾向や精神生活の構造などによって規定される。これは社会に対する思想家の認識の問題であり、かれを刺激した環境はかれの心を通った、いわば心理的環境である。かれの執筆の動機を考究する際にはこの点に留意すべきである。

トマス・モアは、かれの『ユートピア』の第一部で、当時のイギリスの社会状態をかれの目（心）を通して有りの儘に描写し、鋭い社会批判を行なっている。かれのパーソナリティは、いろいろな要因が複雑に絡まっていて、これこれしかじかである、と特定することは困難である。だが、つぎのことはいえよう。すなわち、かれは、古典に通じ、人間を尊重するルネサンス期のヒューマニストとしての社会的性格、信仰の篤いカトリック教徒としてのそれをもち、ロンドンの市民、とくに商人の利益代表をつとめる法律家として活躍し、政治、経済、社会等の知識を獲得する機会にも恵まれた改革者でもある。このようなモアは、封建的生産様式から資本主義的生産様式への過渡期であるとともに絶対主義形成期であるイギリス社会にもたらされた社会悪をかれなりに認識し、的確に批判し、社会問題としてとりあげた。とくに多くの貧しい人びとの悲惨な状態をヒューマニストとして看過することができなかつた。このようなモアの環境に対する見方、とりあげ方はかれの当時までに形成されたパーソナリティのしからしむるところであった、といえよう。そしてかれは、社会悪の根本原因を人間の欲望を駆り立てる私有財産制に求め、私的所有のない理想の社会を構想し、人びとに示そうとした。ここにかれが『ユートピア』を執筆しようとした動機があったのである。なお、この第一部は、第二部のユートピア島の叙述が書かれた後に、書かれているが、第二部が書かれる以前に、モアの心の中にすでに描かれていたといえよう<sup>5)</sup>。

要するに、思想家が環境に刺激されるということは、かれが客観的環境をかれの目（心）、つまりパーソナリティを通して心理的環境にすりかえて刺激されることである。そうしてかれはこの心理的環境に反応することになるのである。つまり、思想家は現実の社会をどのように認識し、どのように対処したか、といいかえることもできよう。

つぎに、思想家が環境つまり心理的環境に反応するということは、かれが、とりあげた社会問題を解決し、望ましい社会を形成したいという欲求を充足しようと努力することである。すなわち、かれは、かれのよってたつ、あるいは代弁する社会的基盤（階層、階級、集団等）に属する民衆の願望、欲求やエートス、さらには萌芽的思想をも多分に含む、そのような欲求を充足するために、空想的欲求に駆られ、直観力を働かせ、思考をめぐらし、あるいは実践して、理想の社会、よりよい社会を追求し、その実現の道を探り、社会思想の体系を、あるいは人倫の理を求めて倫理思想の体系を構成し、それらを著書、論文、書簡、演説等で表明する、

ことである、四囲の情勢によっては、ロックのように、著書を匿名で刊行したり、手記、日記に書き留めたりすることもあるであろう。

このようにして、思想家によって表明された思想が、当代やその後の時代に生活に苦しみ、窮乏に喘ぐ多くの民衆、あるいは、特定の階層、階級の人びとの欲求に応じて、かれらの共感を呼び、かれらによって共鳴され、受け容れられて、かれらの生きるよすがとなり、支えとなり、より広い民衆の中に次第に浸透し、広がり、世論となって強力になり、かれらの行動の指針や目標となり、社会の改造や変革へとかれらを動かし、よりよい社会の発展に貢献あるいは影響を与えるようになれば、ここにはじめて社会思想が成立することになる。このように考えると、社会思想の概念は、すでに述べたように、かなり狭く限定されることになり、それは狭義の社会思想である、と社会思想史の研究者によっていわれるであろう。なお、民衆によって受容されなかった、また社会の形成に影響も貢献もせずに忘れられ、消え去った、あるいは一部の人びとの間で問題にされた理想の、よりよい社会形成の構想もあったであろう。そのような思想をも含めれば、それは広義の社会思想となるであろう。この小論では狭義の社会思想を中心に論ずることとする。

## V 思想の把握についての問題点

上述のように、社会思想が成立してくるが、思想家がある社会思想をもつようになるのはかれのパーソナリティやその形成の過程と密接な関係がある。したがって、思想とパーソナリティとの関係の問題に眼を向けざるをえなくなる。思想家の思想を解釈し、理解し、把握するためには、まず、かれの生活史的展開の過程で、かれのパーソナリティの形成過程を辿り、かれのパーソナリティを把握し、かれの行動傾向の体制、一貫性のある思想傾向を把握することが特に肝要なことである。現今では現に生存するある人のパーソナリティはしかるべき検査によってある程度知ることができるが、過去の思想家のそれについてはこの種の検査は不可能である。したがって究明しようとする思想家の生活史から、できるだけ多くの資料を掘り起こし、かれのパーソナリティを規定する要因を丹念に辿り、パーソナリティを把握するしかないといえよう。だが、把握できるであろうか。

思想家の思想をかれのパーソナリティやその形成過程の面からアプローチできないか、という視点でパーソナリティの形成について述べてきた。したがってその形成の要因については大体わかってきたが、思想家のパーソナリティや思想傾向を的確に把握することはむづかしく、付度するしかない、ということが予測される。その点に関して、思想家のパーソナリティを形成する、あるいは規定する要因を探究するにあたっての留意点やその隘路などの問題点から考えてみよう。

まず第一に、思想家の家系を中心に、かれの遺伝、体質、気質（中枢神経系、自律神経系）、体格、容姿、病気（内分泌系等）などの生得的素質を究明することである。たとえば分裂質的な素質がかれの思想や行動を規定することがあるし、文章のなかに特異な表現やその繰り返しとなって表示されることがあるからである。また、病気によって一時的に人柄が変わり、言動に変化が生じ、さらにはそれが持続されることがあるからである。知能も遺伝するといわれている。したがって思想家の生得的素質を究明することは不可欠の重要なことであるが、過去の思想家については、その資料の点でその究明はほとんど不可能であり、現存する思想家についてもこの点の究明は困難であろう。もちろん資料の点で思想家の生得的素質を全く診断できないとはいえないかもしれない。幾分なりとも推測することができることもあろうが、しかし、大体においてほとんど不可能である。生得的素質が思想家のパーソナリティ、そこに内蔵され

た行動傾向の体制や思想傾向を規定する基盤になっており、これが解明されないことは思想史の研究にとっては致命的なことである。この解明を抜きにして、いくら詳細な研究をし、論議を重ねてもそれは空中の楼閣にすぎないであろう。生得的素質を求め解明することは今述べたように不可能に近いので、思想家の思想を十分に把握することはできないであろう。したがって習得的要素から不十分ではあっても付度せざるをえないことになる。

つぎに欲求の組織体制についての究明である。私たち人間が環境に順応し生存できるのは、人間が生物としての一般的な活動能力をもっており、また、成熟していく能力ももっているが、なかでも食欲、性欲などの基本的生理的欲求をはじめ諸種の欲求ももっている、からである。そしてこれらの諸欲求の群がどのような相互関係にあり、どのような組織体制をつくっているかによって、パーソナリティが特徴づけられる。したがって思想家が欲求のどのような組織体制をもっていたか、を解明しなければならぬが、これもまた至難の業であり、生得的素質の究明とともに、パーソナリティや思想の研究にとって隘路である。このようにして思想的確な解釈、理解、把握は不可能に近いが、しかし、この面からの手がかりをできる限り探るとともに、習得的要素に糸口を求めざるを得ないことになる。

では、習得的要素の面から、思想家のパーソナリティ、ひいては思想を把握することができるであろうか。まず、思想家と環境との関係であるが、多くの研究者は、一般に気候、風土などの自然的環境をはじめ地理的・歴史的（政治史、経済史、社会史などを含む広い意味）背景、つまり社会的環境を究明し、思想との関連を探索している。これは述べるまでもないことである。これらの究明の方法の詳細についてはそれぞれの研究者の秀れた研究に委ねることとする。社会的環境としての当時の、すなわち思想家が生活していた時代の社会の生産様式、社会構造、政治体制、文化の様態、宗教および宗教生活の実相などはどのようなものか、また、それらが思想家のパーソナリティ、つまり人間形成や思想形成にどのように影響したか、ということは当然究明の対象となろう。そして多くの研究者がこの究明にとり組んでいるが、つぎの点に留意すべきであろう。

思想家の社会的基盤は何か。すなわち、かれはどのような階層、階級、集団に属していたか。これらはそれぞれ社会構成上どのような位置にあったのか、また、どのような社会心理や社会的性格をもっていたのか、思想家はこれらをどのように内面化したのかが究明されるべきであろう。ここでいう社会心理とは、階層、階級や集団のそれぞれにとって固有な社会関係によって、またそれらの生存や存在の諸条件によって、自然発生的に生み出され、それらの成員である個々の人びとに広く共通に染み込み、ゆきわたっているものであり、感情、気分、願望、精神的雰囲気、エートス等である。それらは多分に階層的、階級的な性格、集団に特有な性格を秘め、あるいは時にあらわしていることもある。たとえば貧乏人が金持はいいなあと思ひ、金持になりたいと願ったり、また、白人がともに優越感をもって有色人種を軽蔑したり、差別したりすることである。このような社会心理が思想家の心にも染み込んでいることも否定できないであろう。ロックは、絶対王政に対して政治的（市民的）自由を求めた中産階級の願望、また、政治権力と結託して行なわれた国教会の宗教的、世俗的抑圧に対して寛容、信教の自由を求めた非国教徒たち被抑圧民衆の願望と同じ心情を共有し、その実現を求めたといえよう。

つぎに社会的性格というのは、階層、階級、集団や社会的カテゴリーに属する大多数の成員に共通の基本的経験と生活様式によって生み出され、成員によって共有されている、と思われる性格、行動もしくは発想上の中核的諸特徴であり、たとえば、民族的性格、プチ・ブル性、女らしさ、職人かたぎ、官僚タイプ、教師タイプ、商人根性等々といわれるものなどである<sup>9</sup>。これらは、人びとがその属する社会関係の中で一定の役割を繰り返し演ずるうちに自然に身に

具えたもの、である。これらの社会的性格は、多分に、階層的、階級的、集団的といった社会関係の性格や社会カテゴリーの性格を帯びていることは否定できない。トマス・モアは、ルネサンス期のクリスティアン・ヒューマニスト<sup>7)</sup>としての社会的性格を中核にして、社会主義的改革者としての社会的性格などをともにもっていた。また、ジョン・ロックは17世紀イギリスのジェントリ層を基盤とする知識人としての社会的性格を、他のホイッグ政治家としての社会的性格などとともにもっていた、といえよう<sup>8)</sup>。

思想家は、階層、階級、集団、社会的カテゴリーといったいろいろな人間関係に属して生活するなかで、それぞれの社会心理や社会的性格を自然に、無意識的に受け容れて影響されることが多いが、もちろん、それらを意識的に受け容れ、あるいは拒否していることもある。いずれにしろ、これらの社会心理や社会的性格を究明することは、不可欠のことである。なぜならば、これらは思想家のパーソナリティの形成に大きな役割を演じているからであり、また、思想家の思想を理解する重要な手がかりとなるからである。だが、この究明は資料を探究する点で至難の業である。ここにも方法上の限界がある。

つぎに留意すべき点は思想の受容の問題である。各時代、各社会には人びとが生きるよすが、よりどころ、支えとなるいろいろな思想(萌芽的思想、主義、主張、イデオロギーや信仰などを広く含め)があらわれ、蓄積され、伝えられており、それらのあるものは無意識的にあるいは意識的に取捨されて思想家に内在化したと思われる。そこで、かれは、どのような家庭教育、学校教育を受けたか、師弟関係、交友関係からどのような影響を受けたか、どのような研究生活をし、蓄積された思想上の素材や他の思想家の思想をどのように受け容れたか、ということが問われねばならないであろう。かれは、学習、研究の過程において、過去から蓄積された思想や当時の諸思想のうちから、あるものを選択し、それらをかれなりに理解して受け容れる。その際、かれが何を受け容れ、何を受け容れないのか、受け容れた思想をどのように再構成したか、ということが究明されねばならない。かれの受容の仕方は、当時の社会の発展の歴史的段階、かれの属する階層、階級、集団などのもつ社会関係、社会心理、社会的性格、かれの個人的欲望や欲求の組織体制、精神発達の段階、この段階のパーソナリティ、関心、読書範囲などの研究状況等々に多分に依存する、といえよう。これらが複雑に絡まって諸思想などからの受容の仕方、影響のされ方がそれぞれ異なってくるといえよう。

以上のように、環境の影響という面から究明の努力をするとともに、思想家によって書き残された資料を綿密に併読することによって、思想家の生涯のある時期のパーソナリティを推理し、かれの行動傾向の基盤的体制、なかでも、思想史の研究にとって必要な着眼点となるかれのある時期の一定の傾向、方向をもった考え方、つまり思想傾向、思想の一貫性、いわば基底思想、精神生活の構造等がある程度解明できるのではないであろうか。

なお、すでにのべたように、善良な品性が善良な行為をもたらす、といわれるように、一旦できあがった行動傾向の体制はつぎの行動、つまり実践的行為や精神的活動を規定する基盤となるのである。だが、これが終生続くわけでもない。パーソナリティは、一旦形成されると硬化し、終生一貫性を保って変らない場合もあるが、必しもそうとは限らない。長い一生の間であるから、なんらかの要因、たとえば、大病にかかるとか、環境の変化などの条件によって、徐々にあるいは急激に、小さくあるいは大きく変化することもある。全く変化しない、ということがあるかもしれないが、もしそうだとしたら、品性の陶冶ということは無意味になってしまうであろう。したがって思想家の思想が終生一貫していて矛盾していないこともあるが、しかし、ある期間は一貫していても長い間には一貫性を失い、矛盾が生じることも否定できない。また同じ書物の中でも、なんらかの要因によって矛盾する主張が併存する場合もある。よくい



われるように、タテマエとホンネということもあろうし、保身のための逆説的表現、また、矛盾とまではいかないが、婉曲表現ということもあろう。長い一生の間には、このようにパーソナリティに、思想や所説に一貫性がなく、矛盾することがあっても、ある時期のそれらには何らかの特徴や一貫性があり、かなりの程度それを推察することはできるであろう。また、矛盾の理由も検討すべきである。

思想家のパーソナリティを忖度する、つまり蓋然的に推理する場合に、上述の観点を念頭におきながら、資料を検索することになるが、なかでも、思想家を中心に資料となるものをあげれば、述べるまでもなく、著書、論文、講演や講義の原稿、手稿、往復書簡、日記、自叙伝。他人に書かれた伝記、友人たちなどによる人物評となろう。なお、思想家自身の、あるいは周辺の資料のみならず、思想家にとっての客観的環境、つまり当時の社会について究明すべき資料も当然蒐集し、検討すべきである。これには、社会史、政治史、経済史、思想史等があり、また、これら歴史的記述の素材となる文書、日記、記録、伝承、新聞、パンフレットなどが挙げられる。

思想家のパーソナリティを、その構成要因である生得的素質の面から把握するのは、すでに述べたように、不可能である。ということから、習得的要素（環境的要因）の面からアプローチしようと試みたが、思想家の生活史的展開の中から、それらの資料となるものを十分に掘り起こすことはできない。したがってこの面からもかれのパーソナリティを十全に把握することはできないが、ある程度のことを忖度することはできよう。

以上の論述は、思想家が表明した社会思想を究明する前に、まず検討しておかねばならない予備的考察の問題であり、すなわち、思想家のパーソナリティ、そこに内蔵されている行動傾向の体制、なかでも思想傾向、基底思想をいかに把握すべきか、の問題であった。つまり、パーソナリティの面から思想に光をあてていくことが思想を究明する一つの方法ではないか、という論議であった。

思想家のパーソナリティが十全ではないが、一応ある程度把握されたとしたならば、つぎに思想家の表明した社会思想をパーソナリティとの関連でどのように究明すべきかが問われることになる。なお、思想家のパーソナリティを十全に把握できないならば、その面からの思想へのアプローチは意味がないから、行う必要はない、と思われるが、しかしこの面からのアプローチが全く欠落したら、思想の究明は不可能といえよう。ほとんどの研究者が思想家の生涯を論じているのは、パーソナリティという言葉を使っていなくても、この視点を考えてのことであろう。したがって、パーソナリティの把握が十全にできなくても、把握できた限りにおいて、その面から思想にアプローチすべきであろう。思想家のパーソナリティひいてはかれの思想の把握についての主な問題点の一部を挙げれば以上の点である。

## VI 社会思想の解明の着眼点

思想家が著書等で表明した社会思想を解釈し理解し把握するためには、その思想を思想家自身が考えと全く同じように考え理解することであるが、しかし、これは、すでに述べたように、全く不可能な、あるいは至難なことである。したがって、少しでもかれの思想に近づくために、かれのパーソナリティと関連させて、つぎの諸点に眼を向けるべきであろう。

- 1) 思想家の執筆の動機は何か。かれがその動機となった現実の社会批判を行うにあたって、社会問題としてとりあげた矛盾や社会悪といわれる諸現象とは何か。それらがなぜかれらの批判の対象になったのか。かれは、それらの原因を、かれのおこなった社会の分析の結果から、どこに求めたのか。

- 2) かれは、それら社会悪の原因を除去して、社会問題を解決し、理想社会（国家）、あるいは、よりよい社会を建設するために、すなわち、社会の変革のために、どのような理想社会（国家）の構想、理想社会像をもっていたか。また、そこにどのような原理、理念、信念があったか。
- 3) かれは、このような理想社会の構想を実現するために、どのような政策を考えたか。つまり、理想社会、よりよい社会の実現の道、理想と現実とを結ぶかけ橋、理想実現のための手段、方策、たとえば、生産様式や政治機構はどのようなものであったか。
- 4) かれのそのような思想は、かれのパーソナリティ、そのなかに内蔵されている行動傾向の基盤的体制、精神の面でいえば、思想傾向、基底傾向、精神生活の構造によって、どのように規定されたか。いいかえれば、これがかれの思想のなかにどのようにあらわれているか。
- 5) さらに問えば、かれの社会思想は、どの民衆の、つまり、階層、階級、集団の願望、欲求、エーストなどの社会心理や社会的性格をどのように理論化し、定型化し、体系化して代弁したのか。つまり、かれはどのような立場にたっていたか。これは思想のウラというか、裡に潜む基層を見ることである。
- 思想家は、表明した社会思想が民衆やある集団などの願望や考え方を代弁したもの、とは思わず、いわず、その意識もなく、むしろオリジナルで普遍妥当な真理を表明したものと自負しているかもしれないが、上述のような心理的メカニズムは否定できないであろう。また、かれは、その執筆の動機や意図を率直に表明することもあるが、すでに述べたように保身のためなどのなんらかの理由で、婉曲な表明をしたり仄めかしたり、逆説的表明をしたり、することもある。だが、ともあれ思想には社会的基盤がある、ということは否定できない。それを探るべきである。
- 6) その社会思想は、形成されるにあたって、過去を思想をどのように受け継ぎ、展開したか、あるいは全く独創的なものか。つまり、それは社会思想史上の系譜のどこに位置づけられるのか。
- 7) その社会思想（たとえば、理想社会の構想）が当時の歴史的な現実を全く無視した架空な、非現実的なものではなかったか。つまり、現実からあまりにもかけ離れ飛躍してはいなかったか。もしそれが架空であったら、なぜそうなったのか。単なる空想なのか、それともその奥に何が意図されているのか。思想家の意図や主張が、自己保全のために、空想物語という表現形式をとって、カムフラージュされたのか。また、提案された政策が、かれの行った社会についての分析と論理的に整合していたか、あるいは整合せず、かえって理想社会、よりよい社会の実現や社会の変革を阻害するようなことにはならなかったか。つまり提案された理想実現の手段が理想と現実との間の真のかけ橋であったか、どうか。さらに、その社会思想は、思想として、普遍妥当性をもっているか、問題に徹底的に答えているか。論理的密度は高いか、低い。
- 8) その社会思想は、どのような民衆に、どのように受け容れられ、消長したか。それを社会経済史的背景、とくに思想家（代弁者）の立っている社会的基盤——階層、階級など——の抬頭、衰退と関連させて究明する。
- 9) その社会思想は、なんらかの長所、短所あるいは限界をもって消長したにしても、特定の国や社会さらには世界に対して、当時はもちろんのこと、現在や未来にわたって、どのような意義や影響力をもつか。
- 以上の論述は、社会思想を研究する一つの視点、つまりある思想家の社会思想のかれのパー

ソナリティの面からのアプローチとそれに伴う着眼点についての模索を述べたものである。

### おわりに

すでに述べたように、ある思想家の思想、あるいは、社会思想を十全に解釈し、理解し、把握することはほとんど不可能であるが、その思想に少しでもアプローチするためには思想家のパーソナリティやその形成過程からの究明は不可欠の要件であり、あらゆる方法の要石である。だが、そのパーソナリティも的確に把握することは至難の業であるけれども、そこにみられる行動傾向、とくに思想傾向や基底思想をできるだけ把握することに努め、それに基づいてかれの思想を考究すれば、その思想の本質、かれの主張の狙いは大体において把握されるであろう。また、かれ自身が意識していなかったことや秘匿しておきたかったことも見出すことができるかもしれない。なお、この小論では、はじめにことわって述べなかったことであるが、それはある思想を究明しようとする主体（研究者）の能力の問題である。すなわち、かれがその思想を解釈し、理解し、把握することのできる能力、とくに言語力を欠けば、かれは当然その思想にアプローチすることはできないであろう。したがって、主体はそれらの力を養うことが肝要である。これは私の切実な反省でもある。

以上の論議は、パーソナリティという面から、という一つの視点にたつての模索の大雑把な素描であり、また、はじめて社会思想を学ぼうと志向する若い学徒に対する導きの一つの糸にしようとしたものである。したがって、これは密度の高い詳細な論証でも高度な論議でもなく、また、これには論理の飛躍や短絡と思われる点もあろうが、いずれそれらを補って密度の高い詳論にしたいと思っている。筆者の思い至らない点も多々あるであろうし、別の視点からのアプローチも当然あるであろう。そこで、これらの問題については、差し当たり、思想史研究法の専門の研究者たちの研究業績に任せ、これらによって補足してもらうことにする。すでに挙げておいたかれらの著書、論文などの論議を参照してもらいたい。

なお、小論では、思想史研究法やパーソナリティの問題についての専門研究書の論議、主張、意見を参考にはしたが、それらから直接に文言として引用しなかったように思うので、それらの研究書を参考文献として挙げるにとどめ、引用の頁付は省略し、一部分の引用の頁付は参考文献の中で示した。

### 参考文献

1) 思想史の方法についての業績を若干あげればつぎのとおりである。

クエンティン・スキナー・半澤孝磨、加藤節編訳『思想史とはなにか——意味とコンテクスト——』岩波書店、1990年。スキナーは、「新しい思想史学」の旗手と目されている。かれの業績はこの訳書の末尾にあげられているので、それを参照されたい。原典の書名も省略する。

半澤孝磨「政治思想史研究におけるテキストの自律性の問題（一）——Q・スキナーをめぐる方法論々争——について」、『東京都立大学法学会雑誌』第29巻第1号、1988年、37-62頁。

半澤孝磨「政治思想史叙述のいくつかの型について」、『思想』No.794、岩波書店、1990年8月、70-93頁。

小笠原弘親・飯島昇蔵編『政治思想史の方法』早稲田大学出版部、1990年。

中村雄次郎『思想史の方法と課題』東京大学出版会、1973年。

浜井修『社会哲学の方法と精神——批判的理性論集——』以文社、1975年。

行沢健三・田中真晴・平井俊彦・山口和男編『社会科学の方法と歴史』ミネルヴァ書房、昭和53年。

日本倫理学会編『思想史の意義と方法』以文社、1982年。

参考文献は、以上のほかに沢山あるが、上記の文献の中で紹介されているので、この小論では省略する。

- 2) 田村秀夫『社会思想史の視点——研究史的接近——』中央大学出版部、1990年、1-28頁参照。なお、末尾の13頁から16頁にわたって、わが国で出版された社会思想史に関連する著作が序章の参考文献として紹介されている。

- 3) パーソナリティの問題は、本文で述べたように、心理学、社会心理学、社会学、教育学、教育心理学、精神医学等の各分野で詳細に論議されており、筆者の論議は、それらの論議を簡略にし、それらの入門書、教科書、辞典などで述べられている程度にも至らず、それらを越えるものではない。

したがって、どの文献を参考にしてもらってもよく、各文献をいちいち挙げるのを省略し、つぎの文献を挙げるにとどめる。なお、翻訳書については原典の書名を省略する。

G. W. オールポート・詫摩武俊、青木孝悦、近藤由紀子、堀正共訳『パーソナリティ——心理学的解釈——』新曜社、昭和57年。

R. B. キャッテル・斎藤耕二、安塚俊行。米田弘枝共訳『パーソナリティの心理学——パーソナリティ理論と科学的研究——』改訳版、金子書房、1981年。

ラザラス・モナト・帆足喜与子訳『パーソナリティ——原書第3版——』新訂現代心理学入門、岩波書店、1981年。

マッラー編・外林大作編『パーソナリティI、II』誠信書房、昭和42年。

戸川行男、長島貞夫、正木正、本明寛、依田新『性格の形成』性格心理学講座2、金子書房、昭和41年。

詫摩武俊編著『性格の理論』誠信書房、1968年。

ガース・ミルズ・古城利明、杉森創吉訳『性格と社会構造——社会制度の心理学——』現代社会学大系15、青木書店、1987年。

T・パーソンズ・武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社、1985年。

クルト・レヴィン、猪股佐登留訳『社会科学における場の理論』増補版、誠信書房、昭和60年。

E. フロム 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社、昭和61年。

島田一男『性格と人間関係』〔講座人間関係の心理6〕、ブレン出版、昭和62年。

詫摩武俊『性格はいかにつくられるか』岩波書店、1991年。

河合隼雄、一谷暲、星野命、藤永保、鍵幹八郎、水島恵一、土沼雅子『性格の科学』講座 現代の心理学6、小学館、1984年。

祖父江孝男『文化とパーソナリティ』弘文堂、昭和51年。

藤永保『思想と人格』筑摩書房、1991年。

見田宗介『価値意識の理論——欲望と道徳の社会学——』弘文堂、昭和47年。

- 4) 水原泰介、辻村明編『コミュニケーションの社会心理学』東京大学出版会、1984年。

東京大学新聞研究所編『コミュニケーション——行動と様式——』東京大学出版会、1974年。

吉田民人、加藤秀俊、竹内郁郎『社会的コミュニケーション』今日の社会心理学 4、培風館、昭和42年。

グレゴリー・ベイトソン/ジャーゲン・ロイシュ、佐藤悦子、ロバート・ポスバーグ訳『コミュニケーション——精神医学の社会的マトリックス——』思索社、1989年。

- 5) トマス・モア、沢田昭夫訳『ユートピア』中央公論社〔中公文庫〕、昭和53年。なお、中央公論社の『世界名著17』昭和44年に沢田訳のトマス・モア『ユートピア』がエラスムス、渡辺一夫、二宮敬共訳『痴愚神礼讃』、二宮敬訳『対話集』とともにふくめられている。

田村秀夫編『トマス・モア研究』イギリス思想研究叢書1、日本イギリス哲学会監修、御茶の水書房、1978年。

澤田昭夫、田村秀夫、P. ミルワード編『トマス・モアとその時代』研究社出版、1978年。

田村秀夫『ユートピアへの接近——社会思想史的アプローチ——』中央大学出版部、1985年。

- 6) 社会心理や社会的性格については、上記の参考文献のほかに、つぎの文献があり、参考文献が紹介されているので、それを参照されたい。

北川隆吉監修『現代社会学辞典』有信堂高文社、1984年、261-279頁。

塩原勉、松原治郎、大橋幸編集『社会学の基礎』有斐閣、昭和44年、303-311頁。

- 7) オシノフスキー・稲垣敏夫訳、亀山潔監訳『トマス・モアとヒューマンイズム——16世紀イギリスの社会経済と思想——』新評論、1990年。

田村秀夫「ベレストロイカとユートピア研究——ソ連・東欧における最近の動向——」松山大学論集 第2巻第5号、平成2年12月、85-113頁。

- 8) 田中正司『ジョン・ロック研究』未来社、1968年。

井上公正『ジョン・ロックとその先駆者たち——イギリス寛容論研究序説——』御茶の水書房、1978年。

田中正司、平野耿責任編集『ジョン・ロック研究』イギリス思想研究叢書4、日本イギリス哲学会監修、御茶の水書房、1980年。

### Summary

By grasping the personality of a thinker and the process of how his personality was formed, we can better understand his behaviour and the tendency of his thought. And so we generally get to the heart of his social thought. But we cannot completely understand his thought, until we fully grasp his personality, particularly his natural temperament influenced, as it is, by so many things such heredity. And we students lack the full linguistic ability or cognitive faculty and cannot understand his argumments.

Nevertheless, we should continue to investigate his thought, in order to get good ideas with which we will make a better society.

